

●内田 良・著

光文社新書（定価 本体780円＋税）

『教育という病』

子どもと先生を苦しめる「教育リスク」

先日、息子の小学校で「2分の1成人式」が行われた。2分の1成人式は小学4年時に、全国で広く行われている行事である。式のハイライトは子どもから親への「感謝のメッセージ」の朗読。一斉に響きわたる子どもたちの声とハンカチで目頭を押さえる保護者たち。先生は最後に「どうぞお子さんを抱きしめてあげてください！」と盛り上げた。

だが親が来られない子どもはどんな気持ちか。離婚や死別など複雑な家庭環境の子や、親から虐待されている子だったらどんな思いで「感謝」を示すのか。「感動の嵐」の中、ふと考えた。小論文で求められるのは、こうした「あたりまえ」「常識」

を問う思考である。特に教育系のテーマは、従来の学校教育の課題を問う直すものが頻出する。そこで今号では、内田良著『教育という病 子どもと先生を苦しめる「教育リスク」』を読む。

いじめや不登校、体罰など、学校教育では、従来から様々な問題が指摘されてきた。本書の重要な視点は、これらの問題群を「教育＝善きもの（正の側面）」を追求するからこそ暴走したものと捉えている点である。「感動」や「子どものため」という眩い教育目標自体が、「多大なリスク」を見えなくさせてしまう。こうした状況を冷静に捉えるために必要なのが、「エビデンス（科学的根拠）」。

学で一般的な見方を、教育現場の検証にも適用するものである。「エビデンス」で教育を見る

本書は学校での「組体操」「2分の1成人式」「部活動」などを見ながら、「子どもたちのリスク」とともに、これまでほとんど顧みられることのなかった、「教員のリスク」も論じていく。まず注目したいのが、「スポーツには怪我がつきもの」などの「つきもの論」からの脱却。著者はつきもの論は「思考停止状態に陥っている」と指摘する。つきもの論では「どれだけ事故があっても、配慮しなくてよいのか」との反論に応えられない。そこで著者は「事故がそもそ

も何件起きているか」「どのような事件パターンが多いのか」といった、エビデンスによる「教育リスクの検証と対策」に向けて研究を進めていく。

例えばその一つが、『学校での事故の事例と留意点―死亡・障害（昭和60年版）』である。著者が昭和60年以降の死亡事例を一件ずつカード化して分類したところ、6000枚余りになった。「同じような事例ばかりが続いていることに愕然とさせられた」と著者は驚く。事故発生はパターン化でき、予測も回避も可能になると見る。

例えば「組体操」「人間ピラミッド」や「タワー」は今や運動会の花形種目で、近年は「巨大化・高層化・低年齢化」している。兵庫のある中学では100人を超える生徒による10段の高さは建物の3階に及ぶものだ。だがリスクは甚大である。例えば2012年度の「小学校における体育的活動」時の負傷件数を見ると、組体操は跳箱運動、バスケットボールに次ぐ653

との問題も明らかにされた。

部活動顧問のブラックな勤務状況を是正するため、近年は、外部指導者を招く学校も出てきた。だが、問題なのはその指導の在り方だ。学校での死亡事故の大半は、保健体育ではなく部活動で発生している。素人よりも熱心な経験者によって、事故が引き起こされるケースも少なくない。

ここで問われるのは「指導方法」である。著者は「過剰鍛錬」が事故に至ったケースを詳細に検討している。単に練習量を増やすのではなく、限られた時間や日数でどう練習するのか、ここでも「スポーツ科学や運動生理学の知見に基づく練習の設計」が必要になるのである。

国会でも学校での「組体操の危険性」や「熱中症対策」などが議論され、政治課題になっている。教育のリスクを直視し、どう改善していくか。精神論に陥るのではなく、本書に示された「エビデンス」に基づく冷静な議論が、「よりよい教育」に不可欠であろう。（評＝福永文子）

部活動指導はどうあるべきか

次に、「部活動顧問の過重負

3件に上り、特に頸部や腰部など体幹部のケガが22・5%と最多となっている。ちなみに労働の安全衛生の基準を定めた国の「労働安全衛生規則」では、床面から高さ2メートル以上の高所作業では「墜落等による危険の防止」のために、細かな規則が定められている。だが組体操ではこうした「安全配慮」はない。これは大きな問題だ。

組体操は学習指導要領に記載はなく、「不適切」との指摘すらある。それが推奨されるのはなぜか。著者は先生方の多くが、「組体操が『感動』や『一体感』『達成感』を得ることができる」と答えていることに注目する。眩い教育目標が「リスクを不可視化させている」のである。

教育という病

子どもと先生を苦しめる「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」

「教育リスク」



部活動は戦後、「国家の介入から子どもの自主性を守ろう」という教員集団の強い思い」で誕生した。この崇高な理念ゆえ、先生方は今だに「みずからの心

身」の健康を危機にさらされている」と著者は見る。本来、部活動は生徒、教員ともに「自主的」に行うものである。だが実態は半ば強制されている。例えば文科省による公立小中学校を対象にした「教員勤務実態調査」によれば、顧問を担当している中学校教員は全体の92・4%に上る。「これのいったいどこが『ボランティア』と

背景の一つには、学習指導要領での部活動の位置づけの変化もある。現行の学習指導要領では、「学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること」とある。だが「関連づけるとはどういうことなのか、どうすれば関連づけられるのか」「生徒の自主性に応じる教員の立場はどのように保証されるのか」「具体的な検討は乏しい。部活動指導をめぐる教員の過重負担について本書では様々なエビデンスを示している。こうした教員の過重労働に対して、保護者の認知度が予想外に低い